

抄 録

きいことが推測された。

1 県民健康プラザ鹿屋医療センター 2 退職 3 県立大島病院

第51回鹿児島県公衆衛生学会誌上発表

劇症型及び上気道感染症由来のA群溶血性連鎖球菌における菌疫学的解析

上野 伸広 蓑田 祥子 吉國謙一郎
濱田まどか 上村 晃秀 湯田 充典
藤崎 隆司 三谷 惟章

〔第51回鹿児島県公衆衛生学会*〕
平成21年 5月

(内容は第35回九州衛生環境技術協議会口頭発表と同じ)

* 第51回鹿児島県公衆衛生学会の口演発表は中止,
抄録集は発行された。

鹿児島県における高濃度光化学オキシダント出現時の気象要因について

上村 忠司 川畑 正和¹ 坪内 隆弘²
山田 正人 上大藪智徳³ 佐久間弘匡

〔第51回鹿児島県公衆衛生学会*〕
平成21年 5月

本県において2002年4月から2007年6月までの期間中に0.100ppm を超える高濃度 Ox が観測された日の気象要因の解析を行ったところ以下の結果となった。

- (1) 解析期間中高濃度 Ox が観測された測定局の日数は、環境放射線監視センター局が17日、喜入局が11日などとなっており、Ox 濃度が最も低い時間帯は大半の測定局で7時前後であった。
- (2) 高濃度 Ox の観測された日が最も多かった環境放射線監視センター局は、8時～12時にかけて濃度が急上昇するケースが多かった。喜入局は9時～22時にほぼ一山型の緩やかな濃度上昇を示すほか夜遅くから朝にかけて高い濃度を示すケースが多いなど他の測定局と異なるパターンを示した。

また、九州のほぼ全域で高濃度 Ox が観測された2007年5月27日の流跡線解析を行ったところ中国大陸北東部からの移流を示しており、県内の発生源に起因する汚染物質よりも、大陸起源の汚染物質による移流の影響が大

第35回九州衛生環境技術協議会口頭発表

劇症型及び上気道感染症由来のA群溶血性連鎖球菌における菌疫学的解析

上野 伸広 蓑田 祥子 吉國謙一郎
 濱田まどか 上村 晃秀 湯田 充典
 藤崎 隆司 三谷 惟章

〔第35回九州衛生環境技術協議会〕
 平成21年10月 8日 大分市

本県では2007年5月から6月の1か月余りで3名の劇症型A群溶連菌感染症（以下、STSS という。）が報告された。同じ時期、県内の小児科定点医療機関より、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が感染症法施行以来、最高の報告数を推移していた。

そこで、STSS 特有のA群溶血性レンサ球菌（以下、GAS という。）が存在するのではないかと考え、STSS 由来のGAS3株と市中で流行していた上気道感染症由来のGAS18株について、生化学性状、薬剤感受性試験、パルスフィールドゲル電気泳動、T血清型別、spe遺伝子型別を実施し、両菌株の表現型及び遺伝子型の相違について解析を行った。

STSS 由来GASはそれぞれ違う表現型及び遺伝子型を示したが、それぞれが市中流行株の一部と同一の菌であることが推察され、STSS 特有のGAS確認することはできなかった。

池田湖底層の水質変動について

宮ノ原陽子 西中須暁子¹ 永井 里央
 鳥原 誠 坂元 克行 泊 宣和²
 長井 一文

〔第35回九州衛生環境技術協議会〕
 平成21年10月 8日 大分市

池田湖底層の水質変動について、1975年以降継続して実施されている公共用水域水質常時監視の結果をもとに報告した。

底層における全窒素、全リン及びリン酸態リン濃度は、底層がほぼ無酸素状態となった1990年以降増加傾向にあ

ったが、2006年冬季の鉛直循環により急激に減少した。しかし、全リン及びリン酸態リン濃度は、2007年12月以降再び増加傾向を示している。これは、鉛直循環後もほぼ無酸素状態が継続していることから、底泥からのリンの溶出が起きていると考えられる。

底層のほぼ無酸素状態は依然として継続していることから、底泥からの溶出によるリン及び窒素濃度の増加が続く可能性が高く、底層の栄養塩類等の調査を継続することが重要であると考えられる。

1 環境林務課 2 県民健康プラザ鹿屋医療センター